

夏目漱石とクラシック音楽

(第5回)

インテリ男性が弾くピアノ

音楽学者・元東京藝術大学特任教授
瀧井 敬子

夏目漱石はコンサートで音楽を鑑賞することはしたが、楽器をいじることはなかった。『吾輩は猫である』の苦沙弥先生は「バイオリン杯をブーブー鳴らしたりする」が、猫からすると、「ものになつて居らん」。漱石は試しに、ヴァイオリンを鳴らしてみたことがあったのかもしれない。

『それから』では、主人公の長井代助はピアノが弾ける。彼はコンサートに行くだけでなく、ピアノが上手だった。こんなシーンがある。代助が兄の家の門を入ると、家のなかからピアノの音が聞こえてきた。嫂（あによめ）が娘にピアノの稽古をつけているところであったのだ。そこにやってきた彼を見て、「代さん、此所ん所を一寸遣って見せて下さい」と嫂が頼むと、代助はピアノの前にすわり、楽譜を見ながら両手を奇麗に動かした。

『それから』は、明治42年に『朝日新聞』に掲載された小説である。ちょうどこの時期に、漱石家はピアノを買った。連載が始まったのは、6月27日で、座敷にピアノが運びこまれたのは6月30日であった。鏡子夫人はピアノが弾けなかったが、この小説の嫂のように娘がピアノを練習しているときには、そばについていたのであろう。娘の弾くピアノの音は、漱石の書斎に漏れ聞こえてくる。ピアノが弾けるインテリの代助は、漱石のひと

つの「あこがれ」だったのではないだろうか。

明治時代にあつては、楽器を習う男性など、世間一般では軟弱だと揶揄された。田舎ではその風潮はひどく、寺田寅彦は熊本の高等学校時代には、ヴァイオリンをこっそり隠れて、裏山に登って練習していた。ところが、上京して、東京帝国大学理科大学に入ってみると、状況はまるで違っていた。東京のインテリの間では、洋楽フリークであることが、ハイカラの証しにさえなっていた。理科大学の教授たちはそれぞれにピアノ、ヴァイオリン、オルガン、声楽を楽しんでいた。田中館愛橘教授は、フルートを自慢にしていた。

当時、第一高等学校の音楽室にはピアノとオルガンがおいてあつて、誰でも自由に弾くことができた。寅彦の日記をみると、一高へよく行っている。ピアノを弾くためであった。

寅彦は大学2年を終えて、大学3年になる前の夏休みに肺炎カタルを患って1年間休学した。復学して、秋の新学期が始まったばかりの明治35年9月20日、正岡子規の訃報を朝の新聞で知った。悲しみが抑えられず、寅彦は一高へ行った。その日、あいにくピアノは破損して使用禁止になっていた。そのころ寅彦が練習していたのは、モーツァルトの「アンダンテ」であった。しかたなく、彼はオルガンで我慢した。